OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	土佐光信の文芸活動 : 陽明文庫蔵「三十首」歌と連歌
Author(s)	岩崎, 佳枝
Citation	語文. 1986, 47, p. 34-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68745
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

土佐光信の文芸活動

——陽明文庫蔵「三十首」歌と連歌——

岩崎佳枝

はじめに

土佐派を代表する室町後期の大和絵作家土佐光信は、文明元年（一四六九）右近将監絵所預に補任、延徳二年（一四九〇）刑部少輔、明応五年（一四九六）には刑部大輔となる。彼の偉大な画業績は当時の公卿日記等に記され、肖像画家として、また「北野天神縁起絵」や「清水寺縁起絵」など絵巻制作者としての輝かしい足跡も伺える。記録には見えないものの、旧町田家本「洛中洛外図屏風」の原図や、歌合に諸種の職人絵が配された「七十一番職人歌合絵」など、いわゆる風俗画と呼ばれるものも光信の作品と推測されている。(1)

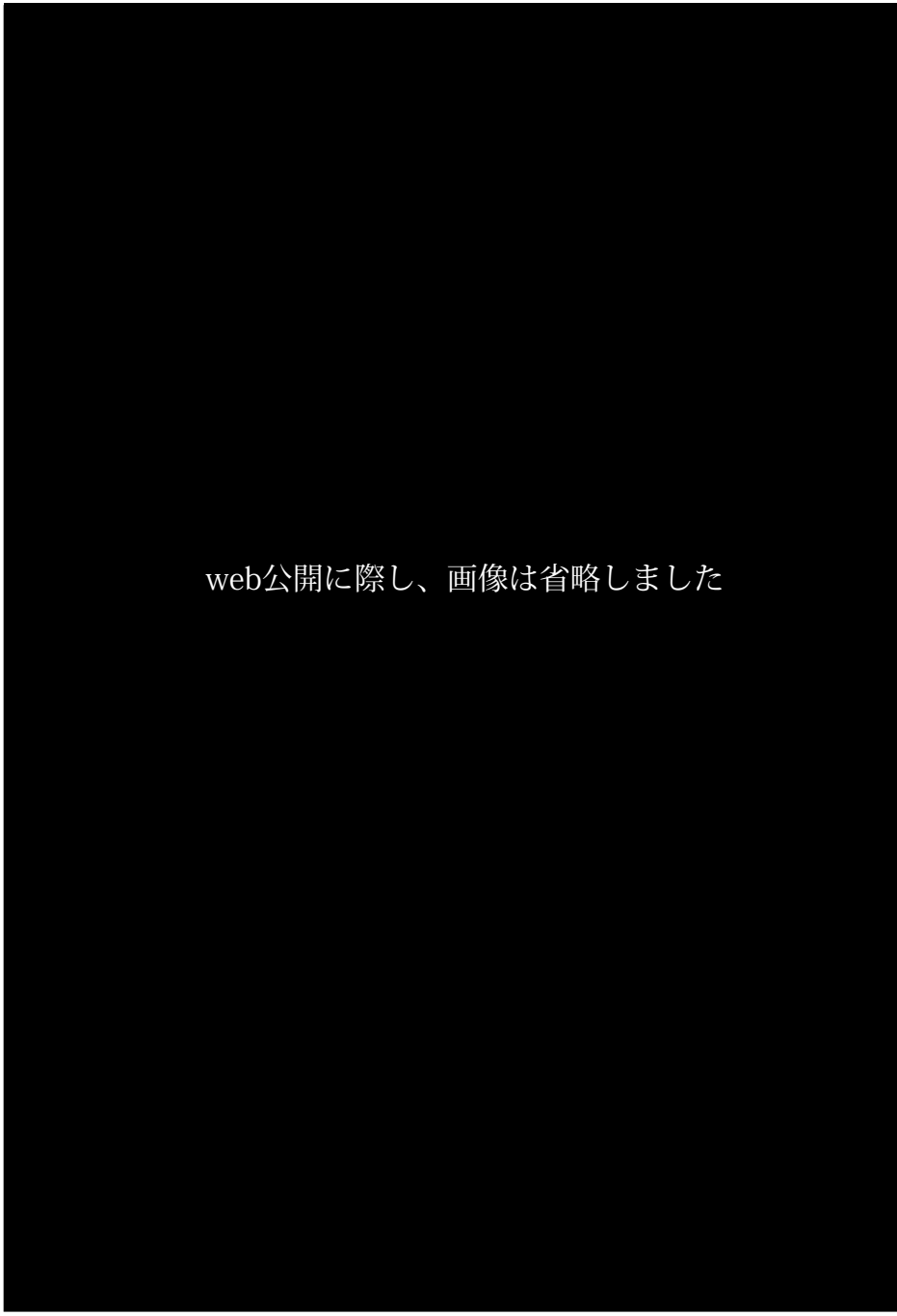
一方土佐光信は、甘露寺元長・三条西実隆・中御門宣胤など当時の貴紳たちとの交流の中にあって、文芸活動ことに連歌活動を盛に行っている。その記録は当時の月次連歌会などに屢々見出せるものである。光信研究では、彼の文芸活動は『元長卿記』永正十年（一五一三）四月八日の条が最初であるとされ、(2)永正十七年（一五二〇）七月二十五日の『二水記』の記載をもってその下限としている。(3)つまり光信の文芸活動は永正年間、それも十年から十七年までの約七年間とされている。確かに公卿日記の記録の上ではそうであろう。

しかし光信の名前は、管見に入るところでは、すでに寛正六年（一四六五）十二月十四日の連歌会に見出され、(4)六十年後の大永五年（一五二五）九月二十一日、近衛植家等との連歌会が最後の記録となる。(5)また両記録の中程延徳三年（一四九一）三月二十四日の人麿新図供養「三十首」歌には奇しくも光信の名前が見えるのである。絵師光信の唯一の和歌資料といえよう。

これらの資料は従来知られることのなかった光信の和歌・連歌の内容を明らかにしてくれるとともに、彼の文芸活動期間および没年時をも大きく更新させるものである。本稿ではそれら新資料紹介とともに、これまで問題にされることのなかった奥絵師土佐光信の和歌連歌作品を浮上させ、彼の文芸活動を和歌史・連歌史の上に位置づけたいと思うものである。

1

『実隆公記』延徳三年（一四九一）三月二十四日の条に次の記載が見える。



〔A〕「三十首」部分 （陽明文庫蔵）

廿四日庚子天晴、早朝向宗祇庵、是兼日招引也、人丸像新図（土佐刑部少輔光信書之、本信実真跡也、讃押定家卿自筆色紙〔山鳥ノオノ歌〕）供養卅首歌講之、来会之衆中御門新大納言、下官、滋野井中納言、中納言入道、題者、冷泉前中納言、姉小路前宰相、稚俊朝臣、其外数輩在之、講師行二、読師予、発声中納言入道、（中納言歌冷泉入道講之）披講了、盖斎食、々々以後数盃巡流、頗酩酊帰宅。

続いて

廿五日辛丑天晴、〈略〉宗祇法師称昨日礼来。

とある。実隆らは延徳三年三月二十四日宗祇庵での人丸像新図供養に三十首を講じたのである。割書によると、もと信実描くところの人丸像を今回新しく土佐刑部少輔光信に模写させ、讃には定家の自筆色紙（山鳥ノ尾ノ歌）を押すとある。

延徳・明応の頃は歌壇も昂揚期・隆盛期とはいえないものの、月次歌会・月次連歌はほぼ毎月、また春日・水無瀬法楽など法楽歌会もしばしば催されていたようである。人麿影供は「柿本影供記」[6]に見られる元永元年（一一一八）六月十六日藤原顕季邸で開催されたものを嚆矢とされるが[7]、中世後期においても影供歌会が流行し、人麿供養歌会も盛んであった[8]。ことに宗祇庵での人麿像新図供養は特筆すべきものであったのか、実隆はこの日の模様を詳しく記していたのである。

当記録はすでに井上宗雄氏も注目し『中世歌壇史の研究　室町後期』に両角倉一氏も『宗祇連歌の研究』において言及され、美術史関係では「土佐派年譜」[9]にも紹介されている。しかし『公記』によって詠者の一部は判明しているものの、披講された三十首とはどんな歌であったのか、残りの詠者たちは如何なる人々であったのか、実際の作品は今日まで明かにされていなかった。実はこの三十首は陽明文庫（所架番号七七五七一）に蔵されていて、縦二八・五糎、全長一〇五・五糎、裏面左端上部に「三十首」と墨書されている。歌題・詠者はそれぞれ一行に記され歌数は全三十首、用紙は薄手の楮紙、未表装仮巻の状態で保存され、巻末に「延徳三年三月二十四日於種玉庵一座」とある。紛うべくもなく『実隆公記』に記すところの「人丸像新図供養三十首歌」（仮題）である。（写真A）

「三十首」は次のごとくである（便宜上全歌に一連番号(1)から(30)を施す）。

春天象　二楽軒宋世
(1)あかねさす日のたて貫にをる衣をのれそめいたす春霞哉
夏天象　松木殿宗綱
(2)けふいくか空とちはてゝ五月雨のはれま雲まも見えぬ比哉
秋天象　三条殿西實隆
(3)あさ霧のあはれそ遠くのこりける月にあかしの名をはとめても
冬天象　滋井（ママ）殿教国
(4)まかへ見し落葉の霜も有明の空も日影にたへぬ色かな
恋天象　冷泉殿政為
(5)いくめくりあはてふる身の一とせをまもれる星も空にことはれ
春地儀　姉小路殿基綱
(6)底ふかきいはみの海を硯にてかくともつきし春の気色は
夏〃〃　飛鳥井殿雅俊
(7)夏かけてなかめし藤の花の色はなを世ににほふたこの浦波
秋〃〃　夢庵肖柏
(8)これも世の心〳〵よしつかなる月はたか津の秋の岩波

冬〃〃　　行二

(9)あかしかた明ゆく雪にほの〳〵と嶋見えそむる波のうへかな

恋〃〃　　二楽軒

(10)うきにのみなかるゝちよを一夜川袖にせめてのしからみもかな

春居所　　種玉宗祇

(11)高色〃に世や春ならし山ふかみ霞はかりの宿のひかりを

夏〃〃　　宗柏

(12)ねやのうちに風ふきとをせけふの日のあつさわるゝ枕たにせん（す）

秋〃〃　　盛郷波ミ伯部兵庫助

(13)秋ふかきやとにそうかふ此ころのあかつきつゆにいにしへの空

冬〃〃　　秀興結城三郎

(14)こすのとに夕の山はいつとなく月もさえつる木枯のかせ

恋〃〃　　光信土左刑部大輔(10)

(15)此くれと契をきてし槙の戸にこゝろさはかす松風の声

春植物　　宗功寺井伯耆入道

(16)花なれや夕を色にきえやらて嵐にかゝる山のはの雲

夏〃〃　　姉小路殿

(17)ひまもなき池のはちす葉玉ちりて水に雨聞音の涼しさ

秋〃〃　　玄清

(18)吹からにやまとにはあらぬくれなゐやもろこしよりの木〻の秋風

冬〃〃　　松木殿

(19)まきひはらみとりに染て冬かれの梢をよそにふる時雨哉

恋〃〃　　宗作

(20)我にうき人のむかしやわすれ草たねとりそめし今のためとて

春動物　　飛鳥井殿

(21)おちくるもあかるも見えす夕ひはりふかき霞の野へに鳴也

夏〃〃　　宗益

(22)ほとゝきす我しのひ音を忘れてやたれもねぬ夜の月になくらん

秋〃〃　　二楽軒

(23)二ねにそなくこよひいつくの遠妻に手枕かへて鹿のふす覧

冬〃〃　　正純

(24)深ぬまの嵐の程は中〳〵に月よりさひしをしの鳴声

恋〃〃　　種玉

(25)人ことにおたしからすは春の駒心あるやと猶そひきみん

春人事　　滋井(野)殿

(26)おさまれる世の春なれやことわさのふるきをうつす風の姿は

夏〃〃　　行二

(27)宿ことにふくてもかくやたゆからんかるもひまなき沼のあやめを

秋〃〃　　冷泉殿

(28)二よしの山桜を雲と見し人も秋のあはれや猶おもひけん

冬〃〃　　夢庵

(29)かへる(下)へき空と見るらしあはれそふ雪の夕をあまのつり舟

恋〃〃　　三条西殿

(30)しるしなき御祓もさそなおもひあるわかみなかみのうけぬ物とて

延徳三年三月廿四日於種玉庵一座

詠者は二楽軒宋世・松木宗綱・三条西実隆・滋野井教国・冷泉政

為・姉小敢基綱・飛鳥井雅俊等公卿歌人七名、夢庵肖柏・行二（二階堂判官入道）・種玉宗祇・宗柏・盛郷（波々伯部兵庫助）・秀興（結城三郎）・光信（土佐刑部少輔）・宗功（寺井伯耆入道）・玄清・宗作・宗益・正純等連歌師・武家歌人・法体歌人、それに絵師が加わり計十九名である。『実隆公記』には来会の衆として公卿歌人（中御門新大納言(11)（宗綱）・下官（実隆）・滋野井中納言（教国）・中納言入道（雅康）・冷泉前中納言（政為）・姉小路前宰相（基綱）・雅俊朝臣）七名のみ記され、あとの詠者名は「其外数輩」として省略されている。詠題は天象・地儀・居所・植物・動物・人事のそれぞれに春・夏・秋・冬・恋を冠した部位となり三十題である。「三十首」は飛鳥井家の長老雅康の詠歌で始まり実隆の歌で終る。雅康のみが三首詠じ、他の公卿は各二首、連歌師では肖柏・宗祇のみが各二首、武家歌人入道行二も二首、後の詠者は各一首ずつである。高点は種玉庵での影供を考慮したためか宗祇となり、飛鳥井雅俊・二楽軒・冷泉政為が次点に、下点は夢庵肖柏の詠歌となる。

次に「三十首」より人麿に因むと思われる歌を挙げよう。

(3)あさ霧のあはれそ遠くのこりける月にあかしの名をはとめても　（実隆）

(6)底ふかきいはみの海を硯にてかくともつきし春の気色は　（基綱）

(7)夏かけてなかめし藤の花の色はなを世ににほふたこの浦波　（雅俊）

(9)あかしかた明ゆく雪にほの〳〵と嶋見えそむる波のうへかな　（行二）

(13)秋ふかきやとにそうかふ此ころのあかつきつゆにいにしへの空　（盛郷）

(28)よしの山桜を雲と見し人も秋のあはれや猶おもひけん　（政為）

右の六首は万葉集・古今和歌集・拾遺和歌集等に見える人麿歌・伝人麿その他人麿に因んだものと思われる。参考までに典拠と推測されるものを補注(12)に掲げておく。

2

陽明文庫蔵「三十首」には延徳・明応期の代表的な歌人たちの詠歌が見える。しかも従来知られていなかった作品が殆どである。三条西実隆の「秋天象」（あさ霧の）、「恋人事」（しるしなき）の歌にしても『再昌草』『雪玉集』には収められていず、冷泉政為の「恋天象」（いくめくり）、「秋人事」（よしの山）の歌も『碧玉集』に記録されていない。他も同様であろう。ここで特に注目したいのは宗祇と土佐光信である。両人は今回の御影供の実質上の主人公であり、連歌界・画壇という異なった世界で活躍していた人である。その両者が同席して、しかも連歌ならぬ和歌を詠じあったのは興味あることといわねばならない。彼らは如何なる歌を詠じていたのであろうか。そもそも如何なる和歌活動・文芸活動を展開していたのであろうか。

延徳三年三月二十四日、種玉庵における土佐光信の歌は

(15)（恋居所）　此くれと契をきてし槙の戸にこゝろさはかす松風の声

右の一首である。彼の詠風等については後述する。また宗祇の供養歌については別稿に譲り、本稿では光信の和歌・連歌活動を中心に

述べる。

文明元年に右近将監・絵所預に任じられた大和絵代表作家土佐光信が好く連歌を嗜んだことは当時の公卿日記からも伺え、『本朝画史伝』[13]や『扶桑名画伝』[14]等近世末の画史伝にも記されている。最近の土佐派の研究、ことに光信の生涯、および画業等については『日本絵巻物全集5』に吉田友之氏の詳細な解説が土佐派の年譜とともに附されている。その中で吉田氏は、国文学界では殆ど注目されることのなかった光信の連歌活動についても触れ、次のように記しておられる。

永正十五年（一五一八）七月の二十日、四条隆永亭で月次連歌会が催された。恒例十六日の月次会が延引されて、この日になった。中御門宣胤・宣秀父子、甘露寺元長、広橋守光（もりつう）、勧修寺尚顕、持明院基春、山科言綱などのいつもの顔ぶれに、定衆ではないが当時第一の連歌の上手といわれた玄清の姿もみえる。頭役は光信朝臣、絵所預土佐光信晩年のいまひとつの顔である。中御門宣胤はこの日の日記に、

蝶の行園生や花の秋の草　光信朝臣

と連歌師光信の発句を書きとめている。

甘露寺元長が、永正十年（一五一三）四月八日、彼の主宰した連歌に光信の名を記して以後、毎月十六日の中御門宣胤らとの月次会、二十五日の山科言綱亭での月次連歌会に彼は定衆の一人として文献に現われる。絵師の連歌といえば能阿弥（のうあみ）をおもうのであるが、光信も永正年間（一五〇四～二一）にはずいぶんと連歌に心をひかれたらしい。それはようやく老境にはいった彼の遊芸三昧の生活であった。その連歌を介して、三条西実隆、中御門宣胤、甘露寺元長など当時の縉紳との懇意な交友から、やがて光信最晩年の「清水寺縁起絵」（図30）が生まれたとみることもできるのである。

右のごとく、吉田氏は『宣胤卿記』永正十五年七月二十日の条にある四条隆永邸での月次連歌会で頭役を務めた光信の発句を紹介している。そして彼の連歌活動はそれより約五年前の永正十年（一五一三）四月八日元長邸での連歌会（『元長卿記』では「八日雨下、連歌興行、姉小路宰相（各継）・宗哲・宗碩・殊全・卜純・周桂・光信朝臣等招之、予発句、なけやこの待夜のかすに郭公　秉燭之後事了各分散」という）が最初であるとされている。また「土佐派年譜」永年十年の項にも「四月　光信　元長邸の連歌会に加わる（元長卿記）。」とされ、それ以前の光信関係連歌記録は見えていない。つまり吉田氏は永年十年（一五一三）四月八日の記録をもって光信連歌活動の最初とされるのである。

ところが永正十年より遡ること四十八年即ち寛正六年（一四六五）十二月十四日の連歌会「何船百韻」にすでに光信の名前が検出される[15]。当会には宗祇の名も見え、発句は細川勝元の「鳥ねふる床は氷し波もなし」、脇句は元説の「汀は雪のうすき朝かけ」である。光信は初ウラ6句目と名残ウラ8句目つまり挙句の二句を付けている。その句は次のようである。

春はまつ馴行人を友として　頼宣
（初ウ6）
みるを便に替す言の葉　光信
花はまた散ぬを誘ふ風もうし　通（賢）
（名ウ8）
大和こと葉の手向いく年　光（信）

（句上）

勝元一句　行助十一　元説七　宗祇十　賢盛十二

具忠五　通賢八　世縁七　心敬十三　弥太郎一

専順十三　頼宣六　常安四　光信二

その後も「熊野法楽千句」[16]（文正元年四月以前）、文明十七年三月二七日[17]、文明十七年三月□[18]、文明十八年三月二十七日[19]、長享二年卯月□[20]、享二年卯月二十五日[21]、明応五年八月五日[22]、明応五年八月十五日[23]、年月日は不明ながら文明年間と思われるもの一例[24]、明応年間とみなされるもの一例[25]、永正四年四月二十七日[26]、永正十六年十二月十六日[27]の各連歌会に光信の名が記されている。

また前記『元長卿記』の他に『宣胤卿記』『二水記』[28]には、永正十四年十月から永正十七年七月二十五日までの約二年九箇月、計十三回の月次連歌に光信の名前が見える。それらはいずれも甘露寺・中御門・山科等公卿の邸宅で催されている。光信の名前は「給所光信朝臣」「光信朝臣」「土佐光信朝臣」「給所土左光信朝臣」「土佐刑部大輔」等呼称はさまざまである。永正十五年七月二十日の四条隆永邸、永正十六年十二月十六日の中御門宣胤邸、永正十六年四月二十五日・翌十七年七月二十五日の山科言継邸での月次連歌会では頭役を務め、自ら発句を詠ずるなど光信晩年の連歌活動はより顕著であったと見るべきであろう。連歌師としての技倆は、若くして連歌式目をも承知していたらしく、寛正六年（一四六五）十二月十四日の何船百韻には名残のウラ8句目挙句を吟じている。この時既に執筆を務めていたのである。ただ記録に見える限り、彼の連歌活動は、文明以前・長享・明応期は主として武家および連歌師サークルの中での活躍であったのに対し、永正に入ると専ら公卿邸での月次連歌会に移り、定衆の一員として迎えられるのである。土佐派の代表的奥絵師としての地位と名声の一端が伺えよう。

このように光信の連歌活動は、管見に入るところでは寛正六年十二月十四日の連歌会が最初といえよう。では下限はいつであったのであろう。果して『二水記』永正十七年七月二十五日（午刻向山科亭月次会常如土佐頭人也）の記録が最後のものなのであろうか。この問題は光信の没年時にもかかわる重要な事項である。

光信の生没年は不明とされる。しかし江戸時代末に著された『地下家伝』[29]には次のごとくある。

光信光弘男　右近衛将監　刑部少輔

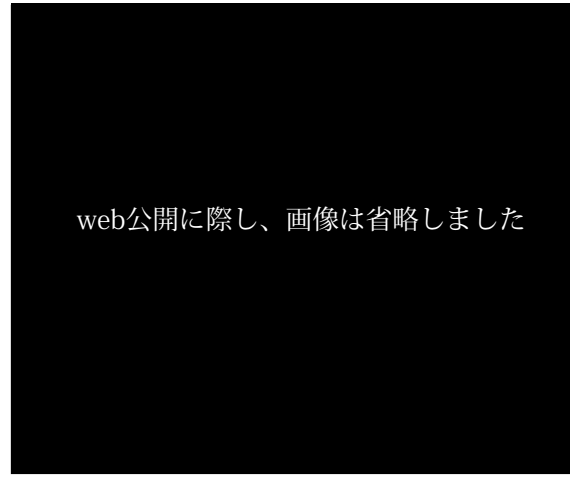
明応四年正月十八日　叙正五位下四十二歳

明応五年十二月五日　任刑部大輔

明応十年二月九日　叙従四位下四十六歳

年　月　日　　卒九十余歳

これによると、光信は明応四年四十二歳、明応十年には四十八歳、没年は天文十二年以降ということになる。また『扶桑名画伝』には「刑部大輔光信朝臣〈略〉其卒年詳かならず。九十余歳といへり。永正頃の人なり。」とあり、『古画備考』の「土佐家」には「大永五年（千虎補）五月廿日光信卒ス、九十二思ひよる日」とある。つまり天文十二年以後説と大永五年説との二説である。大正七年に刊行された『日本美術画家詳伝』[30]には「英一蝶曰、ヤマト絵ハ其上土佐刑部大輔光信ノスサミニ堂上ノウヤ〳〵シキヨリ田家ノフツヽカナル様、岩木ノタヽズマヒ遣水ノメイホク之初リテ末々ニナガレ、予ガ如キ拙キマデ之ヲモトヽス云々ト、傍ハラ連歌ヲ好ミ宗祇ニ従テ学ブ。大永五年



〔B〕「連歌十巻」部分
（大阪天満宮蔵）

五月廿日歿ス。年九十二」と『古画備考』の大永五年説を踏襲している。

しかし谷信一氏は『室町時代美術史論』[31]で光信の九十二歳没説は肯定するとして、没年については両説とも否定され、その理由を次のように記しておられる。

〈略〉これは明らかに誤謬である。それは大永三年十二月には既にその子光茂が左近将監で絵所預を占めてゐるからである。もつとも、この場合は光信が老齢の故に隠退したと考へられないこともないが、大永二年正月十九日に光茂が父に代つて甘露寺元長邸に於る私的な会合に出てゐることは、併せて、この大永二年正月には、既に光信は他界してゐるものとみなければならぬ。〈略〉要するに光信は永正十八年正月廿二日から翌大永二年正月十九日までの間に他行せるものと考へられ、更に簡単に云えば永正十八年に没したと認定しても大過ないであらうと思ふ。

現在土佐派研究において、光信の没年はほぼこの谷氏説が受け継がれ吉田氏も前述の『日本絵巻物全集5』に「永正十八年の三月から七月の間か、翌大永二年（一五二二）四月から十二月のあいだに、光信はかなりの高齢で没した、と推測するほかはないのである。」と記されている。

ところが没年はともかく、光信の連歌活動の下限を示す記録がある。それは大阪天満宮に蔵されている二本の写本である。一本は表題に「連歌千二百句」（文化十年八月写　甲本とする）一本は「連歌十巻」（江戸末期の写　乙本とする）とある。内容はほぼ同じであるが、乙本は発句の作者「梅」の横に朱筆で「近衛稙家公」と記され、句上が附されている。題は「何人百韻」で、年号は「大永五年九月廿一日」とある。じつはこの連歌会に光信の名前が見えるのである。大永五年（一五二五）九月二十一日といえば『古画備考』に川崎千虎（一八三五～一九〇二）が補足した「思ひよる日」の大永五年五月廿日没説[32]よりさらに四箇月後である。

梅（近衛稙家一五〇二～一五六六）の発句で始まる連歌会は次のようである。（甲本を用いて光信関連句のみ掲げる。句上は乙本を用いる（写真B参照））。

大永五年九月廿一日

何人

(発句) 千秋をも隔てぬ菊の籬かな　梅
(脇句) 紅葉の山の庭の松か枝　宗長
(初ウ5) 松に分入野へのゆく末　時茂
そことなく袖ふりはゆる誰ならん　光信
(二オ6) しのひつゝうき中みちの門さして　(珠)易
妹かかきねのよもきふの露　(光)信
(二ウ4) ゆく水も氷る斗の朝明に　(親)高
落来る月のかけの涼しさ　(光)信
影細き雲間の峯の有明に　(材)重
(二オ6) ともしひ更る古寺の秋　(光)信
物思ふたれ身をかくすらん　(保)悟
(名ウ1) さえつるはいつれと聞ん百千鳥　(光)信

（句上）

梅十三句　泰以七（朝比奈）　光信五　宗長十五　鶴舟五　重阿二　相七

句　親高六（小原）　材重六　保悟七　氏兼六（関口）　珠易九（大モ）　泰昭六　時茂六

連歌師宗長をはじめ若干二十五歳の近衛家の当主稙家と駿河今川氏の被官関口氏兼等との交流記録以後、光信の連歌活動は管見には入らない。参考までに、土佐光信の和歌・連歌活動を一覧表に示す。便宜上上欄に(1)から(29)までの番号を施し、活動年時・賦物・句数・発句作者・事項の順に記す。

(1)寛正六・一二・一四　1465　何船2　勝元　連歌会　広大他

(2)（文正元・四以前）　1485（1466）　何路1　賢秀　連歌会　群類　能野法楽千句

(3)文明一七・三・二七　1485　何路　宗伊　連歌会　熱田神宮

(4)文明一七・三・□□　1485　何人（第一）　政元　連歌会　熱田神宮　於新住吉

(5)文明一八・三・二七　1486　何船8　宗祇　連歌会　天理

(6)（文明年間）　1486（1469/1486）　何人12　宗祇　連歌会　天満

(7)長享二・四・□□　1488　朝何9　宗祇　連歌会　於種玉庵　旧福井

(8)長享二・四・二五　1488　何路5　宗祇　連歌会　天満他

(9)延徳三・三・二四　1491　恋居所1　光信　歌会　陽明　人麿供養

(10)明応五・八・五　1496　何路8　宗祇　連歌会　天満　於桜井宅

(11)明応五・八・一五　1496　山何7　兼載　連歌会　天理

(12)明応九・七・一一以前　1500（1492）　何路　宗祇　連歌会　京大他　於天王寺

(13)永正四・四・二七　1511　片何8　宗仲　連歌会　天満

(14)永正一〇・四・八　1513　（不明）　元長　月次連歌会　元長卿記　甘露寺邸

(15)永正一四・閏一〇・一六　1517　（不明）　言綱　月次連歌会　宣胤卿記　山科邸

(16)永正一四・一一・一六　1517　山何　宣胤　月次連歌会　宣胤卿記　中御門邸

(17)永正一四・一二・六（一六日引上）　1517　（不明）　元長　月次連歌会　宣胤卿記　甘露寺邸

(18)永正一五・正・一六　1518　何船　宣胤　月次連歌会　宣胤卿記　中御門邸

(19)永正一五・三・二一（一六日延引）　1518　（不明）　金吾　月次連歌会　宣胤卿記　資定邸

(20)永正一五・四・二六　1518　（不明）　宣胤　月次連歌会　宣胤卿記　中御門邸

(21)永正一五・五・一六　1518　何人　勧黄　月次連歌会　宣胤卿記　勧修寺邸

(22)永正一五・六・一六　1518　何船　広橋　月次連歌会　宣胤卿記　山科邸

(23)永正一五・七・二〇（一六日延引）　1518　（不明）　光信　月次連歌会　宣胤卿記　四条邸・光信頭役

(24)永正一六・四・一六　1519　（不明）　広橋　月次連歌会　宣胤卿記　山科邸

(25)永正一六・六・一六　1519　（不明）（不明）　月次連歌会　宣胤卿記　中御門邸・光信頭役

(26)	永正一六・一二・一六	1519	何船	5	宣胤　多武峯法楽
(27)	永正一六・四・二五	1519	(不明)	(不明)	月次連歌会　国会 山科邸・光信頭役 月次連歌会　二水記
(28)	永正一七・七・二五	1520	(不明)	(不明)	山科邸・光信頭役 月次連歌会　二水記
(29)	大永五・九・二一	1525	何人	5	稙家　連歌会　天満

※右表のうち、(1)(5)(11)は江藤保定著『宗祇の研究』、(8)(9)も同じく江藤保定著『宗祇連歌作品拾遺』に、(2)は『続群書類従』に翻刻、(3)(4)(6)(7)(12)(13)(26)(29)は木藤才蔵著『連歌史論考下』（連歌史年表）に連歌会月日・賦物・作者名のみ記されているが句の内容は未紹介である。本稿執筆にあたり、大阪天満宮・国文学研究資料館その他のご厚意により全容を調査させていただくことができた。光信連歌作品研究として稿を改め発表する予定である。

右の表からも明らかなように、光信の文芸活動は寛正六年（一四六五）に始まり、大永五年（一五二五）まで約六十年の長期間にわたる。連歌を嗜んだ光信は、その間当然和歌の詠作も試みたと考えられる。しかし「人麿新図供養三十首」を除き、彼の作品は現在のところ知られていない。

3

最後に光信の「人麿新図供養三十首」の和歌について述べる。彼の和歌は「三十首」中程十五番目にある。

恋居所　　光信土左刑部大輔

此くれと契をきてし槙の戸にこゝろさはかす松風の声

一見、詠風は凡庸で新鮮さを欠き独創性は感じられない。また「恋」の歌のせいか、絵師としての美意識・美的構成といったものもそれ程見出せない。（「居所」にまつわる「槙の戸」や「松風」の松などに多少垣間見ることはできよう。）じつはこの一首は初句から五句目までの語彙はすべて勅撰集にも見出すことができる。

此くれと　続後撰800（此くれと頼めし人はまてどこずはつかの月のさし昇るまで）・続千載
契をきてし　後撰793（千代へむと契置きてし姫松のねざしとめてし宿は忘れじ）・新古今・新勅撰・続後拾遺・（日記）
槙の戸に　新古今1204（君まつと閨へもいらぬ槙の戸に痛くなふけそ山の端の月）・新勅撰・続後撰・風雅・新続古・（日記）
こゝろさはかす　後拾遺752（こひしさも忘れやはする中々に心さわがす志賀のうら波）・（物語）
松風の声　新古今1201（いかゞふく身にしむ色の変るかなたのむる暮の松風の声）・王葉・続後拾遺・新続古・新葉

詠題を「恋居所」としながらも語句については古歌に添い、内容に関しても想いを自由に巡らし深い情趣を盛り込んだ詠作とも云い難い。しかし反面、光信が和歌に精通していたとも考えられ、文学的教養の深さを物語っているとは云えないであろうか。ただ、一首では詠風を云々することは危険ではあるが、現在のところ光信の和歌資料は「人麿像新図供養三十首」中の右の一首のみに止るのである。

おわりに

文献上、土佐光信は寛正六年（一四六五）から永正四年（一五一一）までの約三十六年間は宗匠[33]である宗祇等を中心とする連歌師たちとの連歌会での活躍、永正一〇年（一五一三）から大永五年（一五二五）の永正から大永にかけては、公卿たちに混って月次連歌会に出席の跡が伺える。そして今回、通算約六十年の連歌活動の中程に当る延徳三年（一四九一）に和歌詠作の記録が見出されたのである。「人麿像新図供養三十首」の記録は、光信と公卿たちとの文芸活動が延徳三年にはすでに始まっていたことをも物語る。

光信の文芸活動期間を大幅に延長させ、没年時を更新させることになる大阪天満宮蔵大永五年九月二十一日の連歌会の記録、ならびに陽明文庫蔵「三十首」は、ともに和歌・連歌研究資料として室町後期歌書目稿に、また土佐派研究として土佐光信年譜に記録されねばならない重要な項目といえよう。

補注

（1）吉田友之氏編著『日本絵巻物全集5』「土佐光信――京中新図の屏風一双――」（昭和五四・八　集英社）「七十一番職人歌合」（東京国立博物館蔵）の奥書に「職人尽絵三巻　土佐光信筆　弘化三年午秋日　法印法眼業信雅模」とあり、当歌合絵を光信筆と記された遺品は多い。

（2）注（1）に同じ、「土佐光信――土佐派の転機――」

（3）谷信一氏著『室町時代美術史論』「土佐光信」（昭和一八・四　東京堂）

（4）寛正六年十二月十四日何船百韻（広島大学国文学研究室蔵）に光信の二句あり（江藤保定氏著『宗祇の研究』――資料編宗祇百韻・千句連歌集――に収録）。

（5）大永五年九月二十一日何人百韻（大阪天満宮蔵）

（6）藤原敦光「柿本影供記」（群書類従巻第二八三第一六輯）

（7）山田昭全氏稿「柿本人麿影供の成立と展開――仏教と文学との接触に視点を置いて――」（『大正大学研究紀要』第五一輯　昭四一・三）

（8）注（7）に同じ

（9）吉田友之氏編著『日本絵巻物全集5』――土佐年譜（昭五四・八　集英社）

（10）土佐光信が刑部大輔に補任したのは明応五年（一四九六）一二月である。宗祇庵での人麿新図供養が行われた延徳三年（一四九一）三月二一日にはまだ刑部少輔である。従って当記録は延徳三年三月二一日以降の写しであることが判る。

（11）「公卿補任」延徳三年の項には「従二位松木宗綱四十七　正月廿五日叙正二位・正三位三条西実隆三十七　侍従・権中納言正二位滋野井教国五十七・正三位冷泉政為四十七　月日民部卿・正三位姉小路基綱五十一」とある。

（12）ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく舟をしぞ思ふ　このうたはある人のいはく、かきのもとの人まろがうた也（古今和歌集409）

柿本朝臣人麿、石見国より妻に別れて上り来る時の歌二首并に短歌

石見の海角の浦廻を　浦なしと人こそ見らめ　潟なしと（一に云ふ磯なしと）人こそ見らめ　よしゑやし浦は無くとも　よしゑやし潟は無くとも（一に云ふ磯は無くとも）（万葉集131）

たごの浦の花をみ侍りて　柿本人麿

たごの浦の底さへ匂ふ藤浪をかざしてゆかむ見ぬ人のため（拾遺和歌集88）

題しらず　　人麿

このごろのあかつき露に我が宿の萩の下葉は色づきにけり（拾遺和歌集1118）

春のあした吉野の桜は人丸が目には雲かとのみなむ覚えける（古今和歌集序）

(13)『増訂古画備考』三三――土佐派・土佐光信朝臣（明治三八・一一第一法現出版）

(14)『扶桑名画伝』巻二三　四位　刑部大輔　光信朝臣（明治三二・二哲学書院）

(15) 本稿土佐光信和歌・連歌活動一覧表参照。

(16)(17)(18)(19)(20)(21)(22)(23)(24)(25)(26)(27)　注(15)に同じ。

(28) 本稿執筆にあたり、『二水記』永正一六・四・二五、同一七・七・二五の条は鶴崎裕雄氏・湯川敏治氏（中世公家日記研究会会員）のご厚意により、内閣文庫所蔵・鷲尾隆康自筆本コピーを閲覧させていただいた。

(29)『地下家伝』二十（日本古典文学全集の内）

(30)『日本美術画家詳伝』他――土佐光信（大正七・九　日本美術鑑賞会）

(31)　注(3)に同じ。

(32) 川崎千虎の大永五年五月廿日（思ひよる日）没説は、大永五年九月廿一日の連歌記録（九を五、廿一を廿と誤読された写本の存在も考えられる）をもって記した可能性もあろう。

(33)　注(30)に同じ。

〔付記〕

小稿執筆にあたって、資料面でお世話になりました　陽明文庫・名和修氏、大阪天満宮・大町文生氏に対し心より深謝申しあげます。

――本学研究生――

徳川黎明会叢書　全十三冊

尾張徳川家に伝来した、未公開資料四十万点余から精選した国文学関係の資料を複製して出版。大半の資料が、今回初めて公開されることになった貴重な内容である。

一　和歌篇「私歌集・歌合」（第一回配本中）。以下、二　古筆手鑑篇「逢左・霜のふり葉・八雲」、三　和歌篇「古今和歌集」、四　古筆手鑑篇「藻叢・桃江・文車」など。年四回配本。最後に和歌索引を別冊にする。

徳川義宣・久保木哲夫・杉谷寿郎・伊井春樹篇。（A5版　思文閣出版　一冊平均定価　一二〇〇〇円）

近松全集　全十七巻

二十余年の準備期間を経て、刊行が開始された近松全集の決定版。最善本を底本とし、厳密なる校訂によって作成された本文と共に、曲節・表記等も考慮して写真版を併せ掲出する。

第一巻～十三巻　浄瑠璃篇、第十四巻～十六巻　歌舞伎篇、第十七巻　資料篇（現在までに、第一巻・第四巻が刊行）

近松全集刊行会（秋本鈴史・井口洋・内山美樹子・大橋正叔・信多純一・土田衛・鳥越文蔵・長友千代治・丸西美千男・安田富貴子・山根為雄・横山正）編。（菊版　岩波書店　予定定価　一冊八〇〇〇円～一二〇〇〇円）